
八百万屋朱顛

酒呑シゲ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八百万屋朱顛

【Nコード】

N6389W

【作者名】

酒吞シゲ

【あらすじ】

1000PV突破、読んでくれてる人ありがとう！これからも頑張るよー！

必要睡眠時間が少ない『ショートスリーパー』と呼ばれる病を患う、ちよつと変わった女子高生。

一人暮らしの貧乏生活をしていた彼女は、体質を生かせる深夜のバイトをしようと決意する。

意を決して働くことになったバイト先は、『人間様お断り』の看板

を掲げる『妖怪用』のお店だった。

適当でやる気があるかないのか分からない店主の伊吹長月。

牡丹雪のような儚なさを孕んだ、伊吹の妹、坂乃。

九十九神になった猫の置物、朝霧。

怖いけど堅気な牛鬼、仁凜。

人間と妖怪の、不思議な絆や縁を、現代を背景にした、彼らの日常を綴った物語です。

1話 『変なお店』（前書き）

二作目です。

前作は停滞中ですが、同時進行で進めたいと思います。

前作と世界観は共有していますが、同じ世界ではありません。

1話 『変なお店』

朧月が空に浮かんでいる。

はつきりとした輪郭を持たず、地平の遙か上空で輝く月が、地上に春風を侍らせている。

朧月の周りには、これまた朧げで曖昧な、灰色の雲たちが舞っていた。

それら全てが、見事な朧月夜を演出していた。

朧月の直下、丹波の山奥。

青々とした茂みを分け入り、情緒を醸す林を割り、木々が生い茂る鬱蒼たる森を抜けた先に、それはあった。

『八百万屋朱顛』

丑三つ時も越えた真夜中であるというのに、橙色の怪しい光を煌々と放っている。

店は一見すれば、ただの居酒屋にしか見えない。

玄関とおぼしき戸の前には『朱顛』と達筆で書かれた、赤い暖簾が垂れ下がっている。

戸口の横には、千客万来と書かれた小判を持った、巨大な狸の置物が鎮座している。

更に狸の反対側には、品書きと思われる板が置いてある。どう見ても居酒屋だった。

だがこの店が、万屋なのか居酒屋なのかは問題ではない。

この店が、『人』用のものか『それ以外』用のものか、だ。
もしも『人』用の店であれば。

わざわざこんな山奥で商いをするはずがないし。

店の周囲に大酒を喰らった飲兵衛のようにゆらゆらと揺れる火の
玉は浮いているはずもないし。

『人間お断り』なんて看板を、店先に大々的に置くはずもない。
そう、つまりこの店は。

妖怪のための店だ。

1話 『変なお店』（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

御批評などあれば、ばんばんよろしくおねがいします！
一気に三話投稿という奇行をしています、はい。

2話 『電話』（前書き）

同日投稿

2話 『電話』

『時給：2500円』

そもそものきっかけは、異様に高い時給に目が眩んだのが始まりだ。

一人暮らしの貧乏学生としては、お金は幾らあっても困る事はない。

だから周囲とは異なっている、自分の特異な身体的特徴を生かしたバイトを探していたのだ。

そしてネットの求人サイトやバイト誌を漁っても、なかなか良いバイトが見付からない日々が続いていた、そんなある日。

街中で超高時給のバイト募集の紙を見つけた瞬間、私は採用条件の項目に目をやった。

『深夜に働ける方。』

この時点で、速攻で決めました。

紙面の下部に記載された電話番号を、先日で四歳になった携帯のカツカツのボタンに打ち込むのに掛かった時間は、多分5秒もかからなかった。

私の特異な体質。

それは俗に言う『ショートスリーパー』というやつだ。

つまり必要最低限の睡眠時間が、一般人に比べて非常に少ないの

だ。

何しろ一日の平均睡眠時間が約20分だ。

この20分という数字が、多いか少ないかというと、ショートスリーパーの中でも、非常に少ない、というか特例に近いらしい。身体的な疲れから睡眠は取るが、一週間は寝ないでも平気だ、疲れを蓄積しないように頑張れば、二週間は寝ないで済む。

テスト期間中は、全国の高校生が羨むこと間違いなしだ。

これまで私を診た医者には口を揃えて、『通常のショートスリーパーとは異なる部分が多すぎる』と言っていた。

『ショートスリーパーでも、二週間を眠らないでいられる事例は聞いたことがない』

『人の体が要求する睡眠時間を、全く満たせていない』
などなどだ。

他に区分する名称がないので、ショートスリーパーと呼ばれているだけだ。

ともかく私にとって深夜のバイトは、客も少なく給金も高い、正に夢のような環境だった。

数回のコール音の後に、プツツという音が通話の開始を告げる。

「はい、八百万屋朱顛です」

電話に出たのは、やや低い声の男性だった。

「あ、先程そちらのお店で、働き手を募集をしているっていう紙を見たので、働かせてもらいたいとお、思いまして」

「・・・・・・・・」

「あの・・・・・・・・？」

「ああ、思い出した」

擬音を付ければポンという音が付きそうな声だった。

「結構前にバイト募集したやつか、『見える』人がいないせいかな、ずっと電話が無かったんだ、かれこれ2年になるかな」

「見える？」

「いや、すまない。じゃあ、採用でいいよ」

「へ？」

いきなり驚くことを言われたせいで、つい素っ頓狂な声を出してしまう。

「だから、採用でいいよ」

「え、でも面接なんかはしなくてもいいんですか？」

「いいよ、むしろここに電話をかけた時点で、君にはうちの店で働く資格がある」

「はぁ……………」

「ともかく、もし働く気があるなら、電話番号の載ってる紙を『よく読んで』、それでも働く気があるなら、今週の金曜日の12時に、紙に書いてる場所に来てくれ、無論夜中のな」

「わ、わかりました」

「じゃあ、いい返事を期待してるよー」

男はそれだけ言うと、電話を一方的に切った。

一方、私はといえば置いてけぼりにされたような感覚に陥っていた。

「紙をよく読んで……………」

呟き、紙面に目を落とす。

すると、そこには先程までは無かった文字が、採用条件の項目に浮き上がっていた。

『怖がりでない方』

2話 『電話』（後書き）

まだ続くよー！

3話 『迷子、案内』（前書き）

今日はここまでですよー！

3話 『迷子、案内』

あつという間に、金曜日がやって来た。

いつも通りに学校に行つて、授業を受けて、友達とお話して、放課後に一緒に街で遊んだり。

ただいつも通りの日常を過ごしていただけなのに、一日一日がとてつもなく早く感じた。

そして現在の時刻は10時30分。

早めの行動を心掛け、家から（マンションの一室）徒歩で1時間、自転車で20分程の勤務先の山に入つたはいい。

入つたは良いが、場所が分からない。

現在位置と、店の場所の二重の意味で。

周囲を見ても、あるのは同じような木々と、同じような風景。

聞こえるのは葉と葉の擦れる音と、鈴虫の綺麗な声（実際は雌を誘う求愛行動）だけ。

「迷子つた」

光源が全くなく、途中まではあつたはずの街の明かりも無くなっている。

「あ、携帯・・・・・・・・」

そうだ、今のご時世、携帯っていう便利な通信機器があるじゃないか、迷子なんて既に過去のものだ、迷子恐るるに足らずだ。

しかし電波を表す三本タワーが、三つとも倒壊しているのを見るのと同時に、私の心のキャパシティーは限界に達し、見事に崩れ去った。

「怖いに決まってるよ、こんな明かりもない山奥。何が『怖がりでない方』よ……」

息をすうつと吸い込み、

「怖いに決まってるでしょー!」

叫んだ。

「店の前で誰かが叫んでるから出てきてみれば、どちらさん?」

不意に、後ろから声をかけられる。

振り向くと、濃い紺色の着物を着た、男が立っていた。

男というより、青年と言った方が正しいかもしれない。

歳のほどは、自分と大差ないだろう。

こんな山奥で何をしているのか、だが驚くべきはそこではない。
青年の容姿だ。

純銀をそのまま系にしたような、美しい銀髪。

その銀系は、青年の項^{うなじ}まで延びている。

瞳の色は深い紫、肌は程よく焼けた肌色。

特別整っているわけではないが、日本人離れた瞳と、純日本人の容姿と相まって、見る人全てを魅了する妖艶さを醸し出していた。

「――あ……………あ」

言葉を失っていた、絶句、なんでも良い。

その瞬間確かに私は、目の前の青年に吞まれていた。

「で、どちらさん？」

「あ、わ、私は……………バイトで……………」

「あー、こないだ電話してくれた子か。よく来てくれた、嬉しいよ。
ていうか来るの早いなー」

そう言ってカラカラと、快活に笑った。

「いや、悪いな。こんな早く来ると思ってなかったから、まだ『見えない』ままなんだ」

「見え．．．．．ない？」

「ああ、ちよつと待つてな」

そう言つと、口の中で何かを呟く。

刹那、青年の背後に橙色の光を放つ、怪しげな店が出現した。まるで、最初からそこにあつたように。

「ようこそ『八百万屋朱顛』へ、店主の．．．．．」

少し考えるそぶりをして、

「伊吹だ」

そう答えた。

一見して居酒屋にしか見えない『朱顛』の中に案内されてみれば、内装は案外まともだった。

外からの風貌とは一転して、雑貨屋と言つた感じだ。

部屋には某『価格の電動よろしくドン・ホーテ』さんもビックリなほどに様々な商品が置かれている、ていうか、外から見た店の大きさと中の大きさが、明らかに矛盾してる、明らかに中がでかい

気がする。

雑貨、食品など何でも置いてある。

部屋には三つに他の部屋に繋がる敷居（内の一つは今入ってきた、玄関？）がある。

敷居の上には、それぞれに文字のかかれた板が貼付けられている。自分の真ん前の敷居の板には『酒処』、右の敷居板には『関係者用』と書かれている。

「まあ色々とやってもらっけど、まずはそこで清算とかやってもらう」

伊吹さんが指差した先には、箱とそろばんの置かれたカウンターらしきものがある。

「清算、ですか」

「うん、そろばん出来る？」

「はい、小さい頃にやってたので問題無いです」

「よかったよかった、どうもレジとかは置く気になれなくてねー」

確かに。置いてある商品も現代的ではなく、何と云えば良いか・・・
純和風な物が多い。

「そついつの嫌いか？」

伊吹さんが私の顔を覗き込んで聞く。

「い、いえ！ 私も日本的なのは良いと思います！」

驚いたことと、いきなり顔がドアップで現れたせいで、噛んでしまった。

「そっか」

ニカツと人懐っこい笑みを浮かべる伊吹さん。

「んじゃあ、他にも色々説明するから、着いてきて」

言っと、伊吹さんは『酒処』の板が貼られた部屋に入った。

さっきの部屋とは打って変わり、落ち着きのある部屋だった。

店の外観通りの、居酒屋風の部屋だ。

壁には窪みがあり、多種多様な日本酒や焼酎が数多く置かれている。

多分洋酒の類は一切置いていない、のだと思う。

カウンター席が十席程と、4人掛けの机が五つほどある。

「この部屋は、まあ．．．．．酒呑むとこかな」

「見たまんまですね」

「うん」

お互い黙り、しばしの沈黙が続く。

「俺はこっちにいることが多くなるかなあ、客もこっちに来ることが多いし、店番が暇だったら君もこっち来てくれたらいい」

「いや、私未成年ですよ」

それに暇だから酒呑むつてのも、店主の発言としてどうなの。

「そんなの気にしないでいいさ、気にする奴もいないし」「私が気にしますよ!」

「はは、でも君も結構イケる口なんだろう?」

「え．．．．．」

「さあ、次行くよー」

言つて、部屋を出ていく伊吹さん。
なんで言つても無いのにわかつたんだろう、私がお酒好きなの。

次に案内された『関係者用』の部屋は、和室だった。
六畳ほどの大きさで、床は全て畳。
部屋の真ん中にはちゃぶ台が置かれ、上にはお茶葉入れと湯呑み
が完備してある。

古きよき日本のお茶の間を想起させる部屋だ。

「ここが……休憩室？」

「どうしても疑問形なんですか？」

「俺ってここ使ったことないから」

「は、はあ……」

「まあ休憩の時とか、あと着替えとかに使ってくれればいいから」

「わかりました」

「あ、お茶請けはその戸棚の上から二段目だから」

部屋の隅に置かれた戸棚を指差して言う。

「お茶請けですか．．．．．？」

「うん、お腹空いたら食べたらいいいから。とまあ、こんな所かな。何か質問は？」

「私の働く場所は、先程の雑貨品の部屋ですか？」

「基本的にはそうなる、あと敬語とか使わなくてもいいから」

「あ、はあ．．．．．えっと、働く時間とかは決まってますか？」

「１２時から準備で、１時から開店で閉店は６時。夏場は１１時から準備で、１２時開店５時閉店。まあ準備なんて殆ど無いけど」

「お給料の支払い方法とかはありますか？ 私は学生なんで、銀行とかは．．．．．」

「現金でも何でもいいよ。後、日払いでも週払いでも月払いでも、好きなのを希望してくれればいい」

「ものすごい適当ですね！」

「それがこの店の持ち味ってことで！」

「は、はあ．．．．．さっきも言いましたが、私は高校生ですが、深夜バイトとか大丈夫ですか？」

「君がいいなら、こっちは無問題」

「私以外にバイトの方は何人ですか？」

「いないな」

「え？」

「君が初バイト」

「冗談ですか？」

「えらくマジだ、こんなところで働く物好きなんて、滅多にいないからさ」

「な、なるほど。じゃあ毎日バイト、入らないといけないですか．．．．．？」

「ああ、君が入りたい日に来てくれればいい。来れない日とかでも連絡はいいよ」

「もう突っ込みませんよ！」

「まあ、気が向いたら来てくれよ」

「なんか、すごいとこに来ちゃったな．．．．．あ、さっき着替えに使って、と言ってましたが、指定の服があるんですか？」

「いいや、私服でも構わない。でも指定の服じゃ無いけど、制服はあるよ」

「制服、ですか？」

聞くと、伊吹さんは戸棚を開けて、私に布を渡してきた。
広げると、鮮やかな紺色が基調にされた、艶やかな着物だった。

「わぁ……………」

貧乏人たる私では、手に触れることもできないくらい高価そうな
着物だけど。

「着物だけど、最近の子は着付けとか出来るのかな？」

「出来ません。出来ないけど着たいです！」

「ん、そうか。でもどうしようか、俺は教えることなら出来るけど
？」

「是非お願いします！」

やたらと食いつく私に、やや苦笑する。

「ああ、じゃあ後でね。さて、もう質問は無いかな？」

「あ、最後に一つ」

「ん、何？」

「紙に書いてあった、『怖がりでない方』って何ですか？」

「ああ、それなら」

カランコロ、カランコロ。

店の方から、下駄で歩く音のような、奇妙な音が鳴り響く。

「お、丁度お客だ。ついておいで、理由がわかる」

「？ わかりました」

何だろう、と怪訝に思いながら伊吹さんに着いていく私。

「おー、いらつしゃい。牛鬼^{うしおに}の爺さん、久々じゃねえか。元気にや
つてたのか？」

「おお、相変わらずさ。おめえも元気そうだな」

「おう、元気も元氣さ、今日は何の用で？」

「近くに寄ったんでな、昔の奴らとも会えるかと思って、一杯引っ
かけにきたのさよ」

「なーるほど、けど生憎まだ開店してないから人は来てないんだ。

まあゆっくりしててくれ、サービスすつからさ」

伊吹さんの知り合いなのか、気さくに会話をするお客さん。

話を聞いていると、常連さんみいるようだ。

こんな山奥で、しかも真夜中の営業だから、お客さんなんて来ないものだと思ったが、意外にも客足はあるようだ。

と言っても、目の前の客は頭から牛のような角が生えていて、足には蜘蛛を思わせるえげつない足があり、人ではないみたいだが。

「ぎ、ぎゃあああああああー!!」

3話 『迷子、案内』（後書き）

さて、一気に読んでくれた方は超絶ありがとう。
一話ずつ読んでくれた方も超絶ありがとう。

どうでしょう、なんか、こつ日常的な小説を目指したいと思ってます。

よろしければ、続きとか期待してくださいw

感想はシゲの動力源となっております。

4話 『蜘蛛脚爺さん』(前書き)

今日は1話投稿で終わりかなあ、よければ楽しんでください！

4話 『蜘蛛脚爺さん』

麗しき女子高生（ただし私を除く）にあるまじき声を上げた私。
その理由は、眼前に立つ一人の男性のせいだ。

「ん？ おい伊吹、この娘っ子、人間か？」

牛を思わせる角を頭に生やした蜘蛛脚爺さんが、私をジロジロと
見ながら伊吹さんに問い掛ける。

「ああ、今日からここで働いてもらうことになった子で……」

そこまで言って、伊吹さんが黙る。

「？」

「そう言えば、まだ自己紹介してもらってなかったな」

「あ……」

「名前は？」

「水雲海波みなくもみなみです、高校二年生やってます」

「海波ちゃんらしいですよ、爺さん」

「いや、そうじゃねえよ……人間をここで働かすたあ、相変わらず馬鹿な事しとるなあ」

蜘蛛脚爺さんが、呆れたような表情でため息をつく。

対して伊吹さんは、相変わらざるのりくらの表現がピッタリ当てはまりそうな表情をしている。

「じゃ、じゃなくて！」

叫んだ私に、二人の視線が刺さる。

「伊吹さん、これってどういう事ですか?！」

「これって何さ」

「こ、こんな怖い……お化けが！」

「だから書いてあっただろ? 『怖がりでない方』ってさ」

伊吹さんは『今更何を言ってるんだ?』とでも言いたそうな顔をしている。

「それって山奥にあるから、来るときに怖がってたりしたら……とかじゃなかったんですか?!」

半ば絶叫に近い声を出す私。

「よくそんな解釈出来たね、ある意味すごいよ」

伊吹さんの呆れの表情が、苦笑に変わる。

「じゃあ、しっかりとっておくよ。ここは『人間様お断り』で『妖怪様大歓迎』の店、『八百万屋朱顛』だ」

「妖怪ってことは、この人も……」

伊吹さんの横に立つ（二本足ではないが）、蜘蛛脚爺さんにしっかりと視線を向ける。

腰から下のは下半身は、凝視すると気分が悪くなるくらいリアルな蜘蛛さんの足。

上半身は人間のそれと同じだが、頭の前頭葉の両端には、人にはない角が生えている。

「ああ、妖怪だよ。ていうか人じゃないよ」

伊吹さんが、ケロリと言い放つ。

「そんなに警戒しなくても、取って食われはしないよ」

恐怖からプルプルと震える足を、必死に後退させる私を安心させるように言う。

「爺さんは紳士的な妖怪だからね。それにこの店の上客だし、すごい古株で、一族の中でも長老みたいな存在だ、人間相手にどうこうすることはない」

「そ、そうなんですか……」

チラッと、蜘蛛脚爺さんを見るが、やはり怖い。

グロテスクな蜘蛛の脚と、それに付随する大量の毛さもさ毛、思わず鳥肌が立つ。

視線を上に移動するが、そちらにもまさに巖^{いわお}と言った風貌の顔がある。

どっちにしる怖い。

「おい、嬢ちゃん」

と、観察していた私に、蜘蛛脚爺さんが声をかけてくる。

「ひ、ひゃい！」

驚いたわけでは無いが、舌が廻らず嚙んでしまっ。

「あー」

蜘蛛脚爺さんが、困ったような顔をして、指先で米神のあたりをポリポリと掻く。

「まあ、あんまりビビんなや。伊吹が働かすくらいだし、ただの娘じゃねえんだろっ」

「は、はい、すみません」

尚もびくびくとする私に見兼ねたのか、蜘蛛脚爺さんは『はあ』と溜息をついて、口の中で何かを呟く。

すると、蜘蛛脚が人の脚にすげ変わった。

「これでいいだろ。ま、なんか困ったことでもあつたら俺か伊吹に
言えや」

不器用な笑みを浮かべてそう言つと、蜘蛛脚爺さんは『酒処』へ
と入つて行つた。

「あ、ありがとござい、ます……」

まだ驚きの余韻があるのか、上手く呂律が廻らなかつたが、何と
かお礼は言えた。

「悪い妖怪じゃない、わかつたろ？」

「は、はい……何だか任侠つて言つか、男気のある方ですね。……
怖いですけど」

伊吹さんは、最後に付け加えられた言葉に笑いつつも、言葉を紡
いだ。

「ああ、本当に格好のいいひとだ。というか、海波ちゃん」

「はい？」

「あんまり驚かないんだね、妖怪だとか信じてる人だった？」

「無論、信じています。小さい頃から、身の回りでは怪奇現象としか言えない事が多々起こってましたので。でも、実際に妖怪さんと会ったのは初めてでした」

伊吹さんは『うんうん』と頷いた。

「てことは、働いて……？」

「働かせて頂きます、正直めっちゃ怖いですけど」

「おおー、そりゃよかった。これで辞められたら、どうしようかと思っただよ」

あまり心配などしてなかったような顔で喜ぶ伊吹さん。

「まー、俺の店で馬鹿なことする奴なんて、そうそう居ないから安心しなよ。それに、そんな輩が居たとしても、海波ちゃんに危害が加わるようなことにはさせないさ」

「あ、ありがとうございます」

真剣な表情で、しかも間近で、思わず赤面してしまう台詞を言われて、ドモってしまふ。

こんな成りでも、女の子なんです！

多少の照れも、何ら不思議はありませんよね。

「あれ、ていうことは伊吹さんも……」

「ああ、人間じゃない」

「ですよね」

『12時30分』、開店時刻まで残り30分。

今、私は『関係者用』の部屋で、伊吹さんに着物の着付け方を教わっていた。

「で、この帯を腰に回す。……大丈夫？」

「うー、難しいです……」

「はは、まあ後々覚えていこう」

笑いながら、気にするなと言ってくれる伊吹さん。

「すみません……」

「いいさ、じゃあ一回着てみようか」

「はい」

『……………』

「どうすれば？」

「いや、服脱がないと着れない」

「え……………?!」

唐突に『服を脱げ』と言われて、驚かない人などいるだろうか、
いやいいない。（反語表現）

「そ、そんな……………いくら何でも服を脱げだなんて……………」

「何も全裸になれって言ってるわけじゃないよ」

「なつてたまりますか!」

「下着くらいつけてるだろう? まさか……………つけてな……………ぶっ」

「着けてますよ! これでもBありますよ! ……………ギリギリ」

「いてて、冗談じゃないか」

鼻っ面を抑えて、笑う伊吹さん。

「女の子にその手の話題はイケませんよ……」

割と落ち込みます。

「あー、ごめんごめん。初めから服を脱いでもらつもりなんかないさ、悪ふざけが過ぎた、すまない」

そんな私の落ち込みようを見て、流石にいたたまれなくなったのか、伊吹さんが平謝りをする。

「最初から言ってくださいよう……」

自分よりも20cm以上高い身長をもつ伊吹さんを、下から睨み付ける。

「悪かったよ、その変わりと言っちゃあ何だが、お詫びにその服は

あげるよ」

ぼんつ、と私の頭を叩くと言うより撫でるに近い感じで、大きな手の平を置く。

それと同時に、私の頭に置かれた手から、霧のような煙のような気体が出る。

煙は私の体を優しく包み込み、すぐに体から離れた。

「はい、完了。着てた服はここに置いておくよ？」

と言う伊吹さんの手には、綺麗にたたまれた私の服。

「えっ？」

すぐさま自分の身体を見る。

「わ、あ……」

そこには、人に着られた事で、更に美麗さを増した、艶やかな紺の着物があつた。

臍のあたりでしっかりと紅い帯が絞められ、右胸の辺りには、鬼^{ほお}灯^{ずき}の刺繍が施されている。

他にも、部分部分に繊細で巧みな装飾が施されている。
素人目で見ても、素晴らしい物だとわかる。

「すごく、綺麗です……」

「ああ、よく似合ってるよ」

呆然と着物を眺める私を、伊吹さんは手放しで褒めてくれた。

「ま、馬子にも衣装ってやつです!」

つい、照れ隠しでこんなことを言ってしまう。

「そんな事ないさ、本当に似合ってるよ?」

それでも尚、私を攻めてくる。

「わ、私をいじめて楽しいですかああ!」

そのまま後ろを振り向く。

「？」

「もういいですよ！」

「ん、そうか？」

「それより……こんな高価そうな物、本当に頂いてよかったんですか？」

「ああ、いいよ。どうせ俺が持つても仕方がないものだ。だって可愛い女の子に着てもらったほうが、そいつも幸せってもんだろ」

「か、可愛いつて……」

なんてことを恥ずかし気もなく言われると、言われてる私が恥ずかしい。

自分でも顔が赤くなっているのがわかる。

「さ、そろそろ開店だ。心の準備はいいか？」

少しだけ、伊吹さんの表情が引き締まる。

「はい！　が、頑張ります！」

「よし、その意気だ。じゃあ、行くよ」

こうして、慌ただしくも私のバイト初日は、幕を空けたのだった。
不安で心がいっぱいです。

4話 『蜘蛛脚爺さん』（後書き）

はい、こんな感じです。

海波は、女の子らしさが出ているでしょうか？

女の子が主人公の小説は、あまり書かないので少し不安です。

伊吹が少々軽い男って感じがしちまっていますが、こいつ割と天然なやつなんで、勘弁してやってください。

約一日で、100PVということで100人もの人に、自分の文章を読んでもらえて嬉しいです。

よろしければ、『ここはこうしたほうがいい！』とか『ここがダメ！』と言った御指摘をしていただけると幸いです。

逆に『ここはよかった』などの感想を頂けると、小躍りしながら夜の街へと繰り出します。

アルファポリスさんのランキング登録もしたので、よかったらポチしてやってください。

最後に、読者さんの好きな『妖怪』をお教えしてもらえれば、本作に登場するかもしれません！

私の好きな妖怪だけだと、どうしても偏りが生じますね。

そう言ったご希望は、感想、またはメッセージで送っていただければオーケーです！

それでは長々と失礼しました！

番外 お客様名簿1（前書き）

作中に登場した妖怪の、簡単な紹介をしましょう！

番外 お客様名簿 1

名前：蜘蛛脚爺さん

種族：牛鬼うしおにき

牛鬼という種族は、残忍な性格で人を食い殺すこともある妖怪。
その体は、頭が牛で首から下は鬼の胴体という奇形（これは牛鬼に限ったことではなく、妖怪全般に共通すること）。

また、上記とは反対で、頭部が鬼で、体が牛ということもある。
本作の牛鬼は、後者の容姿を持つ。

有名なところでは、源頼光の妖怪退治のお話の『土蜘蛛伝説』が有名。

この土蜘蛛は牛の首に蜘蛛の体。

このように、説によって容姿が極端に異なっている妖怪。それが牛鬼である。

ルーツは、西日本に伝わる妖怪。海岸などに現れ、その近辺で歩いたりしていると、牛鬼に襲われるという。

地獄には、牛頭馬頭じきょうばとうという牛鬼もいる。

蜘蛛脚爺さんは、任侠と言った感じで、かつこいお爺さんをイメージしています。

強気を挫き、弱気を助くー！ってね。

牛鬼つてのは、人に対しては乱暴なんです、彼にはそれがありませんね。

余裕というか、貫録が漂っている方です。

まあ、伊吹の店の『朱顛』だから、そんなことする輩はいないです。

番外 お客様名簿1（後書き）

と、言った具合でしょうか。

『もつと詳しく！』や『もつと簡単でいいよ』というお声があれば、それぞれ繁栄させていただきます。

5話 『付喪猫と妹』（前書き）

二日間が開きましたね、申し訳ありません。

なかなか、アクセス数もお気に入りも増えないものですね、当然ですがw

今回から文章を一人称から三人称に変更しています。

三人称のほうが書きやすいですね。

前の話を見て、自分で見てもありえない文章と思いましたw

5話 『付喪猫と妹』

『不安で心がいっぱいです』

という言葉と共に『関係者用』の部屋から出た海波を待っていたのは、不安とは掛け離れたものだだった。
所狭しと置かれた、意図の分からないものから、何故こんな物まで？と思うような商品の山を呆然と眺めながら、海波は呟く。

「客が来ないです」

海波の近くには誰もいない、伊吹も牛鬼の上客と『酒処』で酒を酌み交わし、昔話に話を咲かせている。

誰の耳にも入らない海波の独り言は、悲しくも堆^{うずたか}く積まれた摩訶不思議な商品たちの中に埋もれていった。

『店番が暇だったら君もこっちに来てくれたらいい』

海波が冗談と思っていた彼の言葉は、ふざけでもなく本気の言葉だったのかもしれない。

『がははははははは！』

『酒処』から、牛鬼の蜘蛛脚爺さんの豪快な大笑いが響く。

『わはははははは！』

それに共鳴するように、脳天気さ満開な伊吹の馬鹿笑いも響く。

「ははは……」

それらに呆れるように、海波も力無い笑いを零す。

「ああ、暇だあ……」

働く者としては、褒められる言葉ではないが、気合いを入れてこの場に臨んだ身としては『これぐらいの愚痴は許して』と言っているかもしれない。

海波がカウンターに立って、約一時間が経つ。

その間で来たお客は——無し。

いや、といっても正確には客足が皆無であつたわけではない。

約二『妖怪』。

一妖怪目は牛鬼の蜘蛛脚爺さんと同じような体、だけど蜘蛛脚爺さんに比べると随分若かったので、蜘蛛脚兄さんだろう。

二妖怪目は『見えなかった』。

突然に店の入口の扉が開いたと思えば、外には誰もいず、そして海波のすぐ隣を、ひんやりとした何かが通り過ぎ、『酒処』の扉が、入口と同様に開き、閉まったのだった。

次の瞬間には伊吹の『おー、いらっしやい！』という声だけが『酒処』から響くのだった。

つまり、『酒処』に客はあっても、海波のところに客は来ない。そんな状態が続いてたのだった。

「私の心の癒しは君だけだよ……」

海波がカウンターに置かれた黒猫の置物に語りかける。

傍から見れば危ない人である……その猫が本当にただの置物だったならば。

『そう言ってもらえれば、わしもこの店で延々とジツとしていた甲斐もあるわのう』

炬燵での猫が如く丸くなっていた『黒猫』は、犬で言う『おすわり』の状態になって、海波の言葉へ反応を示した。

夢想もしなかった方向へと、出来事が動いせいで、開いた口が閉まらない海波。

ほっけている海波を放って、猫は続ける。

『変わった娘っ子じゃのう、こんなところで働くとは……』

と、『黒猫』は前足で顔をクシクシと洗い出す。

「ね、猫の置物が喋った……！」

『む、失礼な……お嬢ちゃんから先に話しかけてきたのではないか』

「ま、まさか返事が返ってくるなんて思ってなくて、ごめんなさい……」

『ふむ……礼儀が正しいのは評価しよう』

『黒猫』が奥に神秘的な光が渦巻く瞳を、海波に向ける。

先程まで（海波が置物と認識していたころ）は、ただの硝子玉で、ここまで煌々とした輝きは灯っていなかった。

更に今は左右で瞳の色が違う、左目が蒼で右目が薄い、だが深みまで透き通るような桃色だ。

オッドアイ、医学的には虹彩異色症と呼ばれるものだ。

「綺麗……」

『わしの名前は『朝霧』、朝霧の桜のような瞳を見て、伊吹が名付けてくれた』

「伊吹さんが？」

『わしが『付喪神』になり、伊吹と会ったときじゃ。わしは元々この店にいたからの』

「へえ……」

『それで、娘は名は何と言っ？』

朝霧が再び、海波の目を見据える。

「あ、水雲海波って言います」

不思議と敬語で喋ってしまう海波は、朝霧に座ったまま腰を折って礼をした。

朝霧は海波の様子に、口角を少し上げた。

「朝霧さんも、妖怪なんですね」

礼を終えた海波は、朝霧の瞳を見ながら聞く。

『当然じゃ。ここには妖怪しかおらんし、来ぬ。お主のような人間がこの場所に居るほうが、普通ではない』

「そ、そうなんですか……」

『まあ、伊吹にも何か考えがあつてお主をこの場にいさせるのだから』

言い終えると、朝霧は海波から目を離して、自らの毛繕いを始めた。どうやら話は終わったようだ。

再び、静寂が訪れる。

くし、くし……と、朝霧が毛を繕う音だけが海波の耳に入る。店の入口を見ても、客が来る様子はない。

「はあ……」

『どうした？』

律儀にも海波に対して、溜息の理由を聞く朝霧。

どうやら話をしたくないのではなく、話することがないだけのようだ。

「いえ、お客さんが全然来ないな……と思ひまして。いつも客足は少ないんですか？」

海波がカウンターに立つて以来の疑問を口にする。

『ふむ』と朝霧は頷き、壁に立て掛けられた時計を眺める。

『丑が二つも終わり……か』

「え？」

『もう暫し待て。じきに嫌になるくらい忙しくなる』

それだけ言うと、朝霧は再び毛繕いの作業に戻ってしまった。

海波は朝霧にならうように、時計に目をやる。

『1時50分』

「丑二つ……？」

古来、夏場の2時から2時30分のことを、人は——丑三つ時——と呼ぶ。

草木も眠る丑三つ時、昔の時刻は方位で示されていて、丑三つ時とは『丑寅』、すなわち『北東』。

北東には『鬼門』が存在し、門から鬼が出て来る。

この丑三つの時間とは、言うならば『怪異』の時間。

「朝霧さん、それって丑三——」

海波の声は、扉からの『カランコロ、カランコロ』という下駄で歩くような奇妙な音に遮られる。

ほぼ反射的に、海波は視線を入口へと馳せらせる。

扉の前には、少女が立っていた。

学校のクラスでも小さい方の海波よりも、さらに小さい身長。体躯の半分以上もある、牡丹雪のように白く美しい髪、瑠璃のよ
うな幻想的な雰囲気醸すの青紫の瞳。

思わず体調を伺ってしまいそうなまでに白い肌。

そして、『端麗』という言葉が陳腐に思えるほどの、容姿。
現実から剥離された少女が、そこにはいた。

「い、いらつしゃいませ……」

少女は海波を凝視しながら、カウンターに歩み寄る。

「朝霧、どうして人間が？」

朝霧の前に立つと、無表情に問い掛ける。

『伊吹が決めたことだ。それが酔狂か、何かの思惑があるのかはわ
しにはわからん』

「そう……」

少女は、朝霧から海波に向き直り、左手を差し出す。

「坂乃」

「あ、水雲海波です、よろしく……」

差し出された手を

坂乃は一度だけコクリと首を縦に振ると、『酒処』へと入っていった。

「すごい綺麗な女の子ですね、朝霧さん。誰なんですか、あの子」

『伊吹の妹じゃ』

「ええ?!」

『何を驚いとるんじゃ?』

「でも、全然似てないし……綺麗な所は同じだけど」

『兄妹なんぞあんなもんじゃ』

「そうですか。じゃあお客さんじゃなかったってことですね……」

誕生日プレゼントを親に取り上げられた子供のように、肩を落として大袈裟に残念がる海波。

『何を言っ取る、これから暫くは休む暇もないぞ?』

「え？」

カランコロ、カランコロ、カランコロ、カランコロ。

海波が振り返ると、軍隊蟻のように群がり大挙する人外たちの姿が目に入った。

その様子はさながら――――

「百鬼夜行だ……」

『まあ、頑張れ。大体は酒目当てじゃ』

5話 『付喪猫と妹』（後書き）

如何だったでしょうかー。
妹さん登場です。

次の話は、早ければ今日の夜か、明日になると思います。
それではー。

番外 お客様名簿2（前書き）

再度、作中の妖怪（今回は神様ですが）の紹介です。
興味の無い方は飛ばしてください。物語に何ら支障はありません。

番外 お客様名簿2

名前：朝霧

種族：付喪神

長い時を経た『道具や物』が歳をとり、『道具や物』が意志を持ったもの。

『付喪』というのは当て字で、元は『九十九』と書く。

『九十九』には長い時間や、多くの物などの意味があります。

本では鳥山石燕とりやま せきえいの『百器徒然袋』で、付喪神の紹介が書かれていますね。

今回は特に長い説明はありませんが、これくらいです。

余談ですが、『八百万』にも多くの〴〵などの意味があるので、ある意味では同意味と言えるかもしれません。

番外 お客様名簿2（後書き）

よかったら感想や評価してくださいー。

6話 『大層な笑顔』（前書き）

新しい妖怪、何がいいですかねえ。

6話 『大層な笑顔』

「ふう、つかれたー」

八百万屋朱顛のに、海波の疲れた声が響く。

『今日は少ないほうじゃ、殆どが伊吹の方に行っとったじゃろう?』

朝霧が、カウンターの椅子にもたれ掛かっている海波に言い放ち、壁に立て掛けられた時計に視線をやる。

『ほれ、客はもう来んだろうし、休んでいいじゃろう。疲れているならば、あちらの部屋で休んでおけ。もう客は来んと思うが、来たらわしが相手をしておく』

朝霧に倣い、海波も同じく時計を見る。

4時過ぎ、あと1時間もすれば日が昇るだろう。

勤務時間の終わりは6時だから、まだ約2時間ほど残っている。

「いえ、最後までやってみます。ありがとうございます、朝霧さん」

『気にするな』

照れを隠すように、ソッポを向いて丸くなった。

その様子を見て、つい暖かい気持ちになり、海波は小さく笑みを零した。

そして、ふと思い付いた疑問を口にする。

「でも朝霧さん、その姿だと精算とか出来ないんじゃないですか？」

朝霧は、見た目はどこにでもいるような黒猫だ（瞳の美しさを除けば）。

そろばんで計算ぐらいは出来るだろうが、お金のやり取りをしようとなると、少し無理な気がする。

ちなみに、店に来る妖怪客が商品の売買円に使うのは、意外な事に人間が使う通貨と同じだ。

『人型になれば問題ない』

「人型？」

『うむ。妖力よつりょくで人の型になるのじゃ』

「へえー！ 人になれるんだ……朝霧さん！ 見せてください！」

どんな姿になるのだろう。脳内で朝霧の人になった姿を次々と想

像し、瞳を爛々と輝かせる海波。

黒猫と言えば、西洋の魔女に付き従う使い魔としてのイメージから、黒服を着た初老の紳士なのか。それとも妖怪だから歳は取っていない若々しい姿なのだろうか。

などと、どんどんと妄想を膨らましてゆく、だが

『嫌じゃ』

と、ソップを向いたまま軽く一蹴される。

「ええ、どうしてですか！ さっきは店番を変わってくれるって言うてたんだし、いいじゃないですかー！」

『無駄に力を使う趣味は無いので、残念じゃったな』

「そんな……」

『ほれ。落ち込んだらんで、しっかりと仕事をせぬか』

肩をガツクリと落として落ち込む海波の様子を見て、朝霧は笑いをこらえたような言い方で、窘める（たし）。

「多分客は来ないー、って言ったの朝霧さんじゃないですかあ」

『絶対に来んとは言っておらんからの』

「う、わかりました……」

バツの悪そうな顔で、海波は渋々と姿勢を正して仕事を再開する。

『……機会があれば見せてやろう』

少し拗ねた表情で店番をする海波を見て、同じくバツが悪くなったのか、これまた同じく渋々といった感じで、朝霧は呟いた。

きい。

海波が何か言葉を返す前に、『酒処』の扉が静かに、しかし存在感を伴い開いた。

「やあやあ、もう慣れたか？」

扉を開けたのは、店の主人である伊吹だった。

「朝霧とも仲良くなったみたいだね、朝霧が人と話すなんてこと自体珍しいのにな」

『む、余計な事を話すな、伊吹』

丸くなつたままの朝霧が、桃色の瞳で伊吹を睨む。
睨む、と言つても怒りや憎しみから来るものではなく、親しい者同士だからこそ出来るもの。
言つなら、優しい睨み。

「すまない、朝霧」

それを分かつてか分からないでか、伊吹も柔和に返す。
朝霧は返事だけ聞くと、『気にするな』とでも言つように、身を少し揺すつた。

「で、どうだい仕事は？」

「あ、はい。大丈夫でした！」

「そうか、よかったよかった」

『うん、うん』と頷く伊吹。

「ただ……」

「ん？」

「商品の値段が分からなくて、すごく困りました」

坂乃という少女が来た後の、まるで百鬼夜行のような状態で妖怪たちが店になだれ込んで来た。

大半は海波に物珍しそうに見て『酒処』へと入ったが、極少数の妖怪は適当に店内をぶらつくと、そろって酒を買って、他の妖怪と同じく『酒処』へと入っていった。

その酒の精算をする際に、商品の値段や情報を読み取るバーコードリーダーなどはあるはずもない、そもそも商品にバーコード無いわけで。

とにかく値段が分からなくなる一幕があつたのだ。
親切な黒猫が、横から助け舟を入れてくれなければ、大変な事になつていただろう。

「いやあごめん、すっかり忘れてたよ」

「すっかり忘れないでください！ 伊吹さんは店長なんでしょう？」

「まあ、そうだけだね」

「もう……あ、それで値段はどこに書いてあるんですか？」

「無いよ、値段なんて」

「え？」

朱顛に来てから、何度目かの言葉を発す。

「値段はない、だからその時の気分で決めれば良い」

「そんな、税金とか、色々あるのに……？」

「はははは。妖怪しか来ない店で、人間たちのルールや規範に則ろうとするとは、中々面白い冗談じゃないか」

九分九厘本気で笑う伊吹。

「そっか、そうですね」

半ば以上も諦めた風に、海波は嘆息した。

「しかし、朝霧は随分と海波を気に入ってるんだな」

『ふん』

いつの間にやら『ちゃん』すら付かなくなった伊吹。

対して朝霧は鼻を鳴らすのみだ。

そして暫しの沈黙が流れ、耐え兼ねたように朝霧が口を開いた。

『何故かはわしにもわからん。だが、海波は他の人間とは違う匂いがするだけじゃ』

とだけ言つと、朝霧は軽快なジャンプでカウンターから飛び下りて、『酒処』へと入っていった。

伊吹は去る黒猫を見て、そろそろ定番化しつつある頷きを繰り返している。

「さて、海波」

『酒処』から視線を離さずに、伊吹が海波に声を掛ける。

「何ですか？」

「どうだい、この店は」

伊吹が海波に向き直る。

その顔には、ニヤツとした『気持ちの良い』笑顔が貼りついていてた。

海波は応えるように、張り合うようにニヤアと『大層気持ちの良い』笑顔をペーストして、

『最高ですね』

そう答えた。

6話 『大層な笑顔』（後書き）

誤字、脱字がありましたら、教えていただければ幸いです。

感想、評価、レビューはシゲの原動力となります！

続けて読んでくれてたりする数奇で寛大なるお方はありがとうございます！

7話 『店員会議』（前書き）

書き溜め一つ目、投稿します。

次話は明日か、今日の深夜です。

7話 『店員会議』

八百万屋朱顛、勤務二日目。

昨晚のプチ百鬼夜行にもめげず、夜の12時にはしっかりと美麗な着物に身を包んだ海波の姿があった。

昨日のような辱めを受けてたまるものか、と事前に着物の着付けの仕方を調べてきた彼女に死角はなかった。

若干、着崩れている感も否めないが、初めて一人でしたことを考えれば及第点だろう。

とは言え、着終わるまでに11時からの戦いがあったことを踏まえると、やはり死角は鈍角ほどにはあったかもしれない。

「よし、完璧だ」

「おお、本当に一人で出来たのかい。手伝ってあげたのに」

『関係者用』から少し着崩れた着物姿で出てきた海波に、出来たとへの驚き半分、純度120%の茶化し半分といった具合で話しかける。

「さつきも言いましたが、結構です!」

「はは……さて、じゃあ準備始めようか、昨日は店の説明で出来なかったしね」

「そう言えば、準備って何をするんですか？」

「まあ、大体は話し合いみたいなもんかなあ」

「話し合い、ですか？」

「うん。前からこの店は俺一人でやってたから、仲間と店について話し合う！とかやってみたかったんだよ。あ、ちなみに商品の不足分なんかの補充もこの時間に含まれてるから」

伊吹は初めて友達が出来た小学生が、友達と遊ぶ予定を親に話すような目で、海波に力説する。

「なるほど、補充の話はわかりました！話し合いについては具体的に何を話すんですか？」

「第一の話し合いは『話し合いで何を話し合うか』……かな」

「つまり、まだ何も決めてないんですね……」

海波は肩を落とすことも溜息を漏らすこともなくなった自分の、順応性の高さを褒めたくなった。

「じゃあ、まず商品の値段について話しましょう」

「いきなり『へびい』な話だね」

「でも、利益とかがないとお店が潰れちゃいますし……」

「まあ、潰れる心配自体はないんだけど」

「え？」

呟くように言った伊吹の声を聞き取れず、首を傾げる海波。

「うつん、気にしないでいいよ。でも、利益が無いと坂乃も困るしな……商品の値段なんかは海波に任せてもいいか？」

「う、出来る限り頑張ります……」

店の存続を決めるような大役を、店長から仰せつかった海波はや緊張した面持ちで承諾する。

「はは、そんなに深く考えないでいいよ。それに、皆が買うのは大抵は酒だ。その酒に関しては『うち』で作ってるから気にしないでいい。酒以外を買う奴はそこまで多くないし、気楽に行きなよ」

「わ、わかりました」

少し気が楽になったのか、下降気味だった声色が高くなった。
先程の話題の中で気になっていた単語があった海波は、そのまま

の調子で伊吹に問い掛ける。

「そういえば、坂乃さんは伊吹さんの妹さんなんですよね？」

『さん』『さん』『さん』と三つ続いた敬称のせいで、少し言いつらそうに言つ海波。

「ああ、昨日会ったんだっとな、坂乃から聞いたよ。機嫌が悪くて参ったよ」

「な、何か気を悪くさせるような事しましたか？」

「いや、違う違う。俺が『酒処』で海波の話ばかりして、相手をしてやれないかったから怒っちまったんだ」

不安そうにした海波に、伊吹はすぐさま笑いながらフォローをいれる。

すると伊吹は一度立ち上がり、部屋の隅に置かれた戸棚から『きんぎょく』と呼ばれる寒天に砂糖や水飴を混ぜたゼリー状の和菓子が乗った皿を取り出し、机の上に置いて、再び胡座あぐらを組んだ。

瑠璃るり、真緋あけいろ、深緑しんりょく、紅葉もみじ。

様々な色が混ざり合った、虹のような色彩で彩られたそれを期待の籠った瞳で見る海波。

『食べてもいい』という意味で、机の上に置いたんだろうけど、話の途中でお菓子に釣られて手を出したりした意地汚いかな……

思考しながら、海波はちらちらと伊吹を見る。

伊吹は少女の微笑ましい様子を見て、つい口元を綻ばせてしまう。

「食べてもいいよ」

「そ、そうですか？　じ、じゃあ一つ頂きます……」

海波は自分の考えてたことが見透かされているような気がして、紅潮してしまう。

これ以上はしたないと思われないために、あまり興味が無かった振りをして、一つだけ頂きますと言うが、それも伊吹の口元の綻びを大きくすることになった。

結局は『もつと食べていいよ』という伊吹の言葉で、頬を更に紅くすることになってしまう海波だった。

「コホン……そ、それで、どうしてわたしの話？」

海波は『気を取り直して』の意を含んだ咳ばらいを一つして、伊吹に話の続きを促す。

「俺のどこに来る客が、『あの人間は何だ？』みたいな事を聞き始めたのが、丁度坂乃が来た時に被ったんだ。初めは『なんか面白い能力ちからでもあんのか？』とか『めんこい娘やったの』みたいな事を言うんだけどさ。皆酔っ払ってるから『なかなか可愛い娘だな』とか『めんこい娘やったの』って話をするんだ。それに相槌うつたりす

る内に、あいつどんどん機嫌悪くなるんだよ。昨日海波が帰った後はずっと口効いてくれなかったし……………」

「な、なるほど…………可愛いか…………へへ…………」

仮にも高校一年生の女子高生である海波は、『可愛い』の単語に反応し、嬉しそうに頬を綻ばせた。

伊吹も照れる微笑ましい少女を見て、頬を綻ばせた。

「まあ、そういうわけなんだ…………いつもは一緒に店の手伝いしてくれるのに、今日は部屋から出て来ないんだ」

「でも、昨日も最初は居なかったですよ。それに部屋ってどこですか？ この店って他に部屋ってありましたっけ？」

「昨日は酒母の作業をしたから遅かったんだ。後、店の裏手には家がある、だから坂乃は今部屋の中……………」

「何だかごめんなさい、私のせいで」

「海波は謝らなくていいよ、悪いのは…………甘やかしてる俺、だよなあ……………」

はあー！つと溜息をつく伊吹を見て、海波は苦笑する。

「でも、妹さんがいるなんて、羨ましいですよ。私には居ないんで」

「海波にもいるだろう」

「居ないですよ？」

意味の分からない事を言う伊吹に、再度言葉を紡ぐ。

「まだ分からないさ、けどそのうち分かるよ」

今度は意味深なことを、真面目な顔で言い放つ。

「深くは考えないのが一番。一妖怪の戯れ事かもしれないからね」

一転していつもの伊吹に戻る。

ただ、先程の伊吹とのギャップが激しすぎて、どうにも深く考えずにはいられない海波がいた。

海波は追求しようにも、伊吹の目は追求するなと言っている・・・
・・・ように感じた。

（これがギャップのなせる技かあ！）

悔しさに満ちた海波の心の声が響いた、海波の心にだけで。

「はあ……とにかくどうやって機嫌をとろうかって悩んで――」

カランコロカランコロ。

入店を告げる、奇妙な音が部屋に響く。

「あれ、おかしいな。まだ準備中の札を貼っておいたんだけどな」

「昨日の蜘蛛脚爺さんは普通に入って来ましたよ？」

「爺さんは勝手に入って来るような人だからね。ちなみに『仁凜』な、仁義の仁に凜とするの凜。昔に荒れてた時期があつて、自分でそう改名したんだって。みんなからは『ジンさん』って呼ばれてるよ」

「へえ、そうだったんですか。確かに怖そうな方ですもんね……」

ぶるつと身震いする海波に笑いながら、客の確認にしに行く伊吹。それに気付いて、自分が出ようとする勤労精神のある海波を、伊吹は片手で制して店への扉を開ける――前に、別の誰かが向こう側から扉を開く。

「さ、坂乃……」

次の瞬間には、伊吹の引き攣った声が部屋に響き渡っていた。

7話 『店員会議』（後書き）

ちよつと意味深な部分がありましたね。

何ででしょうね、ちゃんと設定はありますよ！

あ、誤字や脱字があつたら、教えてくれたら嬉しいです！

評価、感想とうはシゲの原動力となっています。

お気に入り登録はシゲが爆発します。

お気に入りユーザーは全シゲが死滅します、お気をつけください。

番外 店員名簿1（前書き）

お客様ではなく、店員の名簿。
今日次話をアップするか、明日にするか迷い中。

番外 店員名簿 1

名前：坂乃ちゃん

種族：不明

バイト初日の客入りがピークの丑三つ前に、店に入ってきた綺麗な女の子。

体の半分以上もある（腰下ぐらいまで）、牡丹雪みらいな銀髪。瑠璃のような幻想的な雰囲気醸し出す青紫の瞳。

そして、髪と同じように白い肌。

瞳の色や髪の色は日本人離れしてるけど、顔立ちは日本人そのものの。

身長は低くて、私（海波）が150ちょっとあるけど、それよりも更に小さい。

髪の色や、整った容姿から分かるように（私は分からなかったけど）、伊吹さんの妹さん。

結構嫉妬深いみたいで、『酒所』で私の話題を شدたお客さんの話に相槌を打っただけで、機嫌が悪くなったらしい（伊吹談）。私には機嫌が悪くなってるようには見えなかったけど。

たぶんブラコンなんだと思う。

番外 店員名簿1（後書き）

この手の文章は、本編とは別にしたほうがいいですかね？

8話 『兄妹馬鹿』（前書き）

投稿です。

お気に入り4件に達し、PV数も1,000を超えました。

これも一重に、私の自己満足の駄文を読んでくださっている皆様のおかげであります。

これからも誠心誠意、粉骨碎身をモットーに続けていく所存でございます、なにとぞよろしく願います。

8話 『兄妹馬鹿』

「さ、坂乃……」

伊吹の引き攣った声が部屋に響く。

店へ通じる扉の前に突っ立っている伊吹の横をすり抜け、紫の着物を着た坂乃が部屋中央に置かれたちゃぶ台の側に座る海波の横へ歩み寄り、そして畳へ腰を下ろす。

坂乃の歩く動作、座る動作には悉くに品があり、同じ少女である海波ですら見惚れるほどだ。

海波は隣に座る美少女を横目で見るが、やはり恐ろしいまでに容姿の整った少女と思う。

首を坂乃と反対側に向けると、扉を開けた伊吹は未だにこちらに背を向けて突っ立っている。

どう行動すればいいか分からなくなり、身動きを取れなくなっているのだ、シニールな光景だ。

「そこで――」

坂乃がか細い声、しかし静まった部屋ではよく響く声を出す。

「扉を開けて立っていたら、虫が入る……よ？」

「はい」

伊吹は二文字で返答すると、速やかな動作で扉を閉める。

そして何故か直立不動で『気をつけ』のポーズを取る、依然として背中では二人に見せたまま、やはりシユールな光景だ。

海波たちから顔は見えないが、彼の顔は青を通り越して緑になっているだろう、言うまでもないが比喩だ。

そんな伊吹の様子を見て、再度坂乃が声を放つ。

「どうして、そこに立ってるの……？」

「いや、別に」

「伊吹さん、こっちに来て座ったらどうですか？」

いつものりくらしとした伊吹から掛け離れ、無言で歯切れの悪い物言いをする姿を見て、昨日の着替えの腹いせとばかりに、伊吹を呼び寄せる。

流石に呼ばれて尚も棒立ち、というのが不自然なのは今の伊吹の頭でも理解出来たようだった。

洪々と海波、坂乃の対面へと腰を下ろす。

顔は緑では無かった、だが確かに顔色は悪かった。

妖怪でも顔色は変わるのを海波は知った。

恨めしそうな目で海波を見るが、素知らぬふりをして視線をそらす。

「きんぎょく、だ」

ぽつりと、坂乃が呟く。

青紫の瞳が見つめているのは、装飾の凝った更に乗った綺麗な和菓子。

見た感じでは表情に変化はないが、少し声のトーンが上がったことから、好物のようだ。

「あ、ああ。さっき海波に――」

『しまった』と口をつぐむ伊吹。

伊吹は会話の糸口を見つけ、海波のことで『機嫌を悪くしている』坂乃に、海波を話をするという愚行を犯してしまった。

垂れ下がった糸を、無防備に手繰った結果である。

「海波が、何……？」

「あ、いや……」

「何……？」

「先程、海波さんに献上奉りました……」

「そう……」

坂乃はその顔に鉄仮面を被り、表情筋を少しも動かさない。
徐々に居た堪れなくなる伊吹、腹いせに伊吹を呼び寄せたことに
一片の後悔を感じる海波。

そんな膠着状態に、とうとう耐え切れなくなった伊吹は――

「ごめん！ ごめん坂乃！」

平身低頭。

伊吹は畳に頭を付け、所謂『土下座』^{いわゆる}を行使する。
そして顔を勢いよく上げて、坂乃に向かって言葉を発する。

「坂乃がきんぎよく好きなのちゃんと覚えてたって！ これは従業員
の海波のための休憩用のお茶請けみたいなもんなんだ！ 昨日だ
って皆が『人間の新人り』とかの話をしなかったら、海波の話題に
すらならなかった！ 客が興味津々で話を聞くから、仕方なく話し
てただけで、坂乃のこと無視してたわけじゃない！ それに当人の
海波を『朱顛』で働かせてるのにも、ちゃんと理由が……」

矢継ぎ早に言葉を繰り出す伊吹の口に、机から身を乗り出した坂
乃が指を当てて沈黙させる。

坂乃は『少し失礼じゃないですか？』と思っただが、口を挟める状
況ではなかったため、渋々と沈黙を保つ。

「ごめんなさい」

伊吹の口を塞いだままで、坂乃が口を開く。

「——え？」

「自分でも、理不尽な振る舞い方してたと、思う……」

素頓狂な声を出す伊吹、それに構わず話を続ける坂乃。

「長月が、どうしてこの子を朱顛に呼んだのか、ちゃんと分かっている。だって、この子は——」

伊吹の口から指を離し、隣の坂乃の頬を、愛おしそうに……まるで恋人へそうするように触れる。

「坂乃……さん？」

「だって、あなたは——」

「——坂乃」

遮るように、伊吹が坂乃の名を呼ぶ。

その目は、いつになく真剣で、常のおちゃらけた雰囲気からは想

像すらできないものだ。

「うん、わかってる」

「本人が気付く時がいつか来る。いつになるかは分からない、だけど俺たちは、時間だけは腐るほどに持て余しているだろ。だから――」

「――待つ」

「そうだ」

「――ちょ、さっきから何を言ってるんですか?!」

置いてけぼりにされた海波が、二人の醸し出す真剣な雰囲気無理矢理に介入する。

「私が気付くときとか……訳が分からないことばかり話して……それに伊吹さんは坂乃さんと喧嘩してたんじゃないんですか?」

「喧嘩じゃないぞ?」

「私が……勝手に機嫌悪くしてただけ……」

「けど坂乃、一体なんで機嫌悪くしてたんだ、昨日あんまり話できなかったからか？」

「別に……それもあるけど……」

緊張していた空気が、海波の一声によって緩くなる。

海波本人は聞こうとしたのだろうが、正反対の結果になってしまった。

伊吹、坂乃の二人も、無意識的に自然とその空気に同調した。

「は、話を逸らさないで……ていうか伊吹さんって鈍い人なんです
ね」

「鈍いつて何が？」

【……………】

少女二名の視線が伊吹を刺し貫くが、本人は『視線に込められた意味』そのものを理解出来ていないため、僅かばかりも居た堪れない空気を感じていない。

「はあ……もういいです、またちゃんと教えてくださいね？」

「『まだ分からないさ、けどそのうち分かる』、ってことで」

「またそれですか……？」

「物事はぐらかして、言葉濁して、戯れ言をほざいて、それで酒を呑む。それが妖怪つてもんだ」

「そんな堂々と教えない宣言されても……というか伊吹さん口調変わってませんか？」

「まあ、気にしないで方向で。妖怪の戯れ『事』かもしれないしな？」

一片方の眼を閉じて、もう片方の眼で流し目をする伊吹。
それがやけに様になっていて、海波は頬を紅潮させる。

「長月が話を暈したり、逸らしたりするのは……いつものこと。もう、慣れた」

幾分か声のトーンが上がった坂乃が、ぽつりと呟く。

「そうなんですか……あ、坂乃さんが言ってる『長月』ってやつぱり……」

「ああ、俺のことだよ。人間で言うところの『名字』だな、俺が『伊吹長月』、坂乃が『伊吹坂乃』。まあ、どっちで呼んでくれてもいい、むしろ名前で呼んでくれた方がしっくりする」

「は、はあ」

改めて伊吹の名前が明かされた所で、丁度時計の長針が一の方
向を指し示した。

「よし、じゃあ今日も頑張っていこうか！」

先程まで緊張で顔色が変わっていたのを忘れさせるような、快活
な声を上げる伊吹。

それを意図的にしているのか、無意識的にしているのかは分から
ない。

九分九厘くぶくりん、前者であると思ったのは、海波だけでは無かったはず
だ。

「坂乃さんも、こんなお兄さんを持って大変ですね……」

「うん。あと——」

こくんと頷き、さらに言葉を続ける。

「『さん』は、いらない……敬語も、いらない」

「あ、わかりまし——わかった。じゃあ、これからよろしく
ね、坂乃ちゃん」

「よろしく……海波」

8話 『兄妹馬鹿』（後書き）

読者さんの好きな『妖怪』をお教えしてもらえれば、本作に登場するかもしれません！

私の好きな妖怪だけだと、どうしても偏りが生じますね。そう言ったご希望は、感想、またはメッセージで送っていただければオーケーです！

評価、感想とうはシゲの原動力となっています。

お気に入り登録はシゲが爆発します。

お気に入りユーザーは全シゲが死滅します、お気をつけください。

9話 『朝霧桜』（前書き）

見た方は少ないでしょうが、予約投稿にしたつもりが、深夜の4時に投稿してしまいました、気にしない気にしない。

二日連続更新です。

九十九神の朝霧の、人間姿が今回で明らかになります。こついうのは有りがちかもしれないので、ガツカリさせてしまったらごめんなさいね。

後、三人称での【伊吹】の呼び方が【長月】に変わっています、分りにくいかもしれませんが、ごめんなさい。

海波も【伊吹さん】から【長月さん】に変わっています。

9話 『朝霧桜』

「よろしく、海波……」

坂乃はの正面に立つと、海波の瞳を正面から見据える。そして凝視しないと分らないくらいに小さく、だけど確かに坂乃は微笑んだ。

同性であることなど関係なく、海波は呆然ぼうぜんとその様を眺める。
ただ全てを魅了みりようする存在として、少女は海波の前に立っていた。

『おい、海波。カウンター頼むぞー』

店からの、口調ががらりと変わった長月イ吹からの声で、海波は意識を戻す。

「あ、はい！　じゃあまた後で、坂乃ちゃん！」

「うん。後で私もお店手伝う……ね」

坂乃に顔を向けながら店に歩を向ける海波が、坂乃の言葉に『ありがとう』と会釈えしやくを返す。

現在は時刻にして1時前。

海波は昨夜の経験から、まだ少なくとも1時間はお客は来ないだ

ろつと予想していた。

だが、だからと言ってそれが怠^{なま}ける理由などにはならない。

海波は着物を線をしっかりと正して、気合を入れる。

しかし、未熟な海波が着付けた着物は、線を正してもどこか着崩れているという見方が出来る。

胸元を隠すための布地は際どく乱れて、なまめかしい白^{やわはだ}い柔肌の姿を伺わせている。

言い換えれば、変に着崩れているせいで、艶^{あで}やかな色つばさを醸し出しているとも言えるだろう。

青春を謳歌する男子高校生が今の海波の姿を見れば、間違いなく劣情を抱くことだろう。

海波自身は己の事を客観的に見て、『平均的』な女子高校生と思っている。ルックス的な意味でも学力的な意味でも、あらゆる面で彼女をそう思わせているのには理由がある。

今までの高校生になるまで男子生徒に言い寄られたことは皆無。無論そうなると色事、つまり異性交際の経験もない。

街中で男性に言い寄られたこともない。

彼女は、人生で三度は訪れると言われる『モテ期』とやかも、自分には来ないのだろうな、とすら思っている。

だが、彼女がモテない理由は自身の行動にある。

運動は出来ても、運動系部活動に参加しない。

騒々しい人や、見た目が苦手な人とは友人関係にならない。

この場合の騒々しい人や苦手な人とは、学校でクラスを中心に成

っている人物らのことだ。

一概にそうとは言えないが、中心となる人物は基本的に、性格が大人しくなさ『すぎ』たり、外見的に『激し』かったりする。

髪を染めていたり、ピアスをしていたり、必要以上に化粧をしていたり、などなどだ。

海波はこのような人が苦手なのだ。嫌いなのではなく、自分とは合わないというのが正しい言い方だ。

彼らのテンションに付いて行ける自信などもないし、もしかしたら『イケない人』や『イケない事』に付き合わされるかもしれない。そう思うと、海波は不安で交遊関係を築くことが出来ないのだ。

ただ、話し掛けられればキチンと返事をするし、何かの誘いを受けたら丁寧に対応する、誘いを受けるか受け取らないかは別にして。

つまり、だ。

海波は今まで、学校、街中などに関係なく『目立たない少女』だった。

だから、学校でも街でも男性の目に止まることもなかった、私生活以外では度の入っていない眼鏡伊達眼鏡を付けていたことも、目立たなさを助長する原因となっていたことだろう。

これらが、海波が『モテない』原因だ。

そして、海波自信が自分の事を『モテない』と思っているのも、自分の『目立たない』行動からくるものだ。

実際の海波の評価は『美少女』と言って、何ら問題のない容姿の持ち主である。

大人しめの性格とは反比例する、少し釣り上がった狐目のような目尻、そしてどこか憂いを波乱だ薄茶の瞳。

高い鼻、細い顎、石榴色の唇、薄く紅みがかった頬、などの整った顔のパーツ。

線の細い四肢に、スラリと伸びる長い脚。

極めつけは、腰上まで伸びるウェービーヘアの、黒曜石のような美しい黒髪。

十人が見て十人が『可憐』と評することだろう。

少し着飾り、薄く化粧でもすれば、一躍学校も街でも注目の的だろう。

つまるところ海波は自信を卑下するような容姿は、ひとひらたりとも持ち合わせていないのが、事実である。

かんわきゅうたい
閑話休題。

「よい、しょつと……」

特に意味はないが、定型の掛け声を出して、カウンターの内側に置かれた椅子に座る海波。

カウンターのの上には、朝霧が丸くなって眠っている（若しくは眠っている振り）。

最早、海波に正体を隠す必要もないため、置物としてではなく『

九十九神』としての姿だ。

「こんばんは、朝霧さん」

依然丸くなつたままの黒猫に、海波が挨拶する。

『今日も来るとは、仕事熱心なことじゃのう。それとも暇なだけかの……？』

「あはは……」

若干きつい事を言つてノビをする朝霧に、海波は苦笑する。

「なんだか、ここが気に入っちゃったのかもしれないです。暇なのも事実ですけどね」

『やはり変わり者じゃよ、ヌシは……人間だというのに、人間味が薄いしの』

「それって酷いなあ……」

『気を悪くしたならすまぬ。ただ、来る妖怪たちが人間を見ても、大きな反応を起こさぬのでな』

「あ、はい……」

律儀に詫びる朝霧に、恐縮してしまう海波。

そしていつの間にやら、朝霧は姿勢を正して海波に向き合っていた。

「朝霧さんは……」

『うむ？』

「私のことが、好きですか？」

『——つにゃ！ な、何をいきなり言つのじゃ？！』

落ち着き払っていた朝霧が、今までにないような慌てようを見せる。

「き、昨日。長月さんが『朝霧が人と話すなんて珍しい』とか、それに『朝霧は海波を気に入ってるんだな』って、言ってたので……」

『ま、まあ。他の人間よりはマシじゃの……礼儀もあるし……な、なかなか見込みはある……嫌いは出ない、す、好きだ……』

「朝霧さん……」

『な、なんじ——』

ふわっ。

『——にゃっ！』

『なんじゃ』と言い終わる前に、朝霧の言葉は猫独特の鳴き声によって遮られる。

無論、鳴き声の主は朝霧だ。

『こ、こら海波っ！ 何をしとる、離さんかつ！』

朝霧が常と違う、少し高い（だが、爺さんの声）声を出す。海波に対しての言葉であるが、対する海波は——

「ぎゅうううう……！」

嬉しそうに、本当に嬉しそうな表情で、朝霧の小さな体に抱き着いている。

しかし朝霧を潰してしまわないように、力加減は忘れていない。

「こんな可愛い猫さんが、私のこと好きって言うってくれるなんて……！ 感激です、感激です！」

『わしは朝霧じゃ、離しとくれ海波……！』

「ぎゅうううう……！」

いつの間にか『海波』と呼ぶ朝霧と、それにすら気付かずに朝霧を愛でるのに勤しむ海波。

朝霧の蒼と桃色の瞳は、既に諦めの色が漂っていた。

「朝霧さんー」

『——っ！』

朝霧が何事かを呟き、締め小さく叫ぶと同時に、朝霧の体が橙色の煙に包まれる。

海波も急な出来事に、朝霧から離れる、というより跳ね飛ばされるの方が正しいかもしれない。

「まったく『妖怪』の話を聞かん奴じゃの……」

「え……？」

煙の中から響く朝霧の声、しかし先程までとは大きく違う。それは、

「わしは愛玩動物ではないのだぞ？」
あいがん

——それは、声。

老人のような、落ち着きを孕んだ優しい声ではない。
言うなれば、鈴。

鈴のように凜とした、しかし幼く愛らしさを感じる高い声。

「朝霧、さん……？」

「わし以外に誰がおる？」

立っていたのは、少女。

歳のほどは小学校の高学年、五年生くらいだろうか。

背丈は海波よりも低く、坂乃よりも低いだろう。

朝霧と同じく、左目が蒼く右目が桃の色。

シャギーの成されたショートカットヘア、髪色は右目と同じ桜
のような美しい桃色だ。

愛らしく、しかし気品の漂う少女が、立っていた。

「——それが、人の姿……？」

「そうじゃ。全く、しつこく抱き着きおって……」

ぶつぶつ、と抱き着かれたのがそんなに不満なのか、不機嫌そう
に少女がぼやく。

「女の子、だっただんですか？」

「む、気付かなんだか？」

おや？と朝霧が海波に視線を向ける。

「だってあんなに低くてしゃがれた声だから、おじいちゃんなんだとばかり……！」

「目の前の物だけに惑わされるな、じゃからそうなるんじゃない」

少女特有の高い声で、似合わぬ物言いをすると、何とも言えぬ違和感を感じる。

だが。

だが海波は今だけは違和感を拾わずに投げ捨て、朝霧に向かって言った。

「とりあえず何か服を着ましょう」

9話 『朝霧桜』（後書き）

どうでしょうか、楽しんでいただけましたか？w
朝霧は可愛い猫でしたね、はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6389w/>

八百万屋朱顛

2011年9月26日14時59分発行